

青年団公演 冒険王

1996年4月27日(土)〜29日(月) 利賀・新緑フェスティバル 新利賀山房
 1998年5月23日(木)〜6月17日(月) アコラ劇場

キャスト	小杉(なんとなくいる)……………山内健司	中島(カップルで旅行中)……………田村みずほ
	高橋(寝ている人)……………永井秀樹	沢田(最初に出発する)……………小林一博
	栗本(針金売り)……………田中ひろし	スタッフ
	吉岡(インド帰り)……………秋山建一	作・演出……………平田オリザ
	篠塚(ふらふらしている人)……………大塚秀記	美術……………杉山至
	大橋(これからアジアに行く)……………坂本和彦	装置……………播間愛子
	桜田(ヨーロッパを回っている)……………小河原康二	照明……………岩城保+ZEST
	中村(スケナカさん)……………足立誠	◇……………西本彩
	中村太郎(中村さん)……………志賀廣太郎	宣伝写真……………橋口譲二
	杉崎(女性客)……………山村崇子	宣伝美術……………齋田弥生
	染谷(ニューヨーク帰り)……………増井太郎	◇……………高橋京子
	高原(染谷の婚約者)……………平田陽子	制作……………松尾洋一郎
	宮島(女子大生)……………辻美幸子	◇……………赤列奏子
	国崎(女子大生)……………渡辺香菜	
	栗本和子(栗本の妻)……………安部聡子	
	寺田(カップルで旅行中)……………じょじ伊東	

あとがき

この「冒険王」は、私の十六歳から十七歳のあいだの旅の記憶を凝縮させた作品である。初演のときには、「初の自伝的演劇」というキャッチフレーズをつけていた。

公演当日のパンフレットに、私は以下のような文章を載せている。

* * *

君知るや、かの惨憺たる八十年代の夜明け

1979年	1月	* イラン、バハレビー国王エジプトに亡命。 イランイスラム革命成立
	2月	ホメイニ氏、パリからイランに帰国
	3月	アメリカスリムマリル島原発事故
	5月	* エジプト、イスラエルと平和条約締結 サッチャー政権誕生 * 平田オリザ、世界一周自転車旅行に出発
	6月	東京サミット
	7月	* SONY、ウォークマン発売
	8月	* イランで姦通女性、銃殺刑 平田オリザ、北米大陸を横断
	10月	* 韓国、朴大統領暗殺

1980年

11月	パハレビー元国王、アメリカに入国
11月	* ホメイニ派の学生、テヘランのアメリカ大使館を占拠
12月	* ソビエト軍、アフガニスタンに侵攻 金大中氏軟禁解除、ソウルの春
1月	* アメリカソビエトのアフガニスタン侵攻に抗議して、モスクワオリンピックボイコット決定
2月	平田オリザ、冬のイスタンブールに滞在
3月	レークブラッド、冬季オリンピック
4月	エーリヒ・フロム死去 米特殊部隊、イランの人質救出作戦失敗
5月	* サルトル、ヒッチコック死去 * ユーゴ、チトー大統領死去 * アメリカ、セントヘレンズ山噴火
6月	* 韓国、光州で市民が戒厳令軍と衝突 大平首相、総選挙期間中に死去
7月	* ハンリー・ミラー死去 * モスクワオリンピック開幕 平田オリザ、イスタンブールに二度目の滞在

*印は、直接、今回の芝居のなかに出てくる話題に関係するものです。

というわけで、いろいろあったわけですが、もちろん、このお芝居の関心は、こういった事件の羅列にあるわけではなく、まあ、簡単に言ってしまうと、出演者のほとんどが、上演時間のほとんどを、寝そべりながら過ごす演劇ができないものかと、そんなことを考えながら作ったのがこの作品です。

いよいよ同時多発会議も、行くところまで行ったかという感じで、立体になると、もう手に負えないというか、私の小さな頭のなかでは組み立て不可能な状態になってきます。戯曲を書いていながら、誰がどこにいるのかが、非常につかみづらいのです。俳優もきつ、慣れるまで大変だったことでしょう。

さて、これまで青年団の芝居では、時事ネタはタブーとなっていました。で、まあ、このところも今回は初めての挑戦です。時事ネタが茶飲み話としてではなく交わされる状況というものを考えて創ったつもりです。そういうえば、こんなに男ばかりが出てくる芝居というのも、久しぶりです。

それから、前宣伝では、私の「自伝的戯曲」と銘打っていたわけですが、やはり出来上がったものは、いまの私の視点から見ただけでなく、十代の私など、どこにも、ここには三〇代の私だけがいるというのとは否めないと、あるいは、最初から、十代の私なんていなかったのかもしれないし、また、三〇代の私というものもないのかもしれない。人間、たしかに歳はとりませんが、歳をとったからといって、そう簡単に進歩したり、発展したりするものでもないでしょう。

じゃあ、何故今さら、そんな昔話を書くのかと聞かれれば、書くことがなくなったからというのが、存外一番あたっているかもしれない。ただ、書くことがなくなっても書き続けざるを得ないような状況にあること。書くことなどないという状況のなかからこそ、一丁書いてやるかという心境になっていること、この点だけが、十代の私と三〇代の私の小さな隔たりなのかもしれない。そして、そのことを進歩と考えるほど私は楽観的ではありませんが、かといって決して否定的にも捉えてはおけません。書くべきことなどなくなっても、止めどなく溢れ出る表現の欲求はあるのです。ここから勝負だろと、これは真剣に思っているのです。

なお、この戯曲に出てくるお話は、たまたま本当のこともありますが、たいていはフィクションです。騙されないようにして下さい。芝居を見せといて、「騙されるな」というのも変ですが、老練心ながら、忠告まで。